年過ぎた今日、いまだにあのときのうれしさは忘れられません。そして、先に目についたのは、私の入営時の写真に陰膳を供えてくれた様子を知り、親の深い愛情と御恩をつくづくと感じ、これでこそ無事に帰れたのだなあと思いました。

復員後の話はいろいろありますが、切なくて書きませんが、満州で一番うれしかったことを話そうと思う。それは密山で親類の一等兵に招かれ、知り合いの人が来てるから面会させてやるとのことで、将校室のドアをノックしてあけて中に入り、十五度の敬礼をして頭を上げるまでだれであるか分からなかった。見れば私の故郷、地元湯浅の前田彦次郎氏である。場所は将校室、部屋には外にはだれもおらない、前田氏一人である。前田氏が言う。「湯浅に帰ればお前のうちとは心やすい仲間じゃないか、そうかたくなるなよ、だれも来ないから甘い物でも食えや、元気でやれよ」と励ましたの声をかけてくれました。階級差別の厳しい軍隊の中のやさしい言葉である。あのときの言葉は、私には一生忘れられない。

前田さんも無事復員され、現在七十三歳、達者で農業をされております。いつまでも元気でおられますようお祈り申し上げる次第です。

昭和十九年十月二十日入営、昭和二十三年十月二十九日復員。四年間、国のために。七十歳。

交戦、抑留体験記

茨城県 高橋 太造（旧姓 遠藤）

私は、茨城県鹿島郡若松村大字太田新田日和山という所で、大正十四年六月十四日に生まれた。小学校は隣村の矢田部小学校に入学、十五年に卒業した。一年後、満蒙開拓青少年義勇軍に参加、十六年三月に内原訓練所に入所した。

家業は農家であるが、父は桶屋職人でもあり兼業とも言える。家族は祖母と両親、兄三人、弟三人、妹三人の十人兄弟の大家族であった。小さいときから家業の手伝いをさせられて育った。

十六年の入所後、三カ月内原で訓練を受け、十六年五月満州に渡った。奉天省昌図県昌図にあった満州開拓青年義勇隊訓練所において一年の基本訓練を終了、東滿総省東寧県東寧の義勇隊訓練所にて実務訓練を終了、北安省依安県泰安の入植予定地に先遣隊として入植した。その年満十九歳になった私は、昭和十九年から行われた繰り上げ徴兵検査を受けることとなった。

北安省北安で徴兵検査は行われた。甲種合格格である。早速故郷の家族にも知らせた。男として名誉だと考えた。一度両親に会いたいと思い、矢も楯もたまらず、幹部に帰省を願い出たが許されず、卒業しているのので帰省を強行した。昭和十九年八月のことである。内地は想像以上に緊張していた。物資もなかった。八月末、通知を受け、急ぎ満州泰安に戻った。入営通知であった。東滿総省琿春県春化第一三二部隊、第一機関銃中隊とのことであった。親兄弟にも会った、心残りはない。

昭和十九年十月十日入営日である。数々の思い出を残し、四年にわたる拓友たちと別れて出発した。隣の

大子の明和開拓団の斎藤さんの所で一泊し、家族的な温かい待遇を受けた。斎藤さんのところでも長男の福男さんが琿春の歩兵連隊に同日入営するので、一緒に入営の祝いをしていただいた。入営をした連隊長は山本大佐、大隊長は石井常義大尉、機関銃中隊長は竹島篤二郎中尉であった。入隊してきた初年兵は、全部満州にいた人たちで、義勇隊満鉄開拓団（満拓）が特に多く、したがって優秀な人たちが数多くいた。

機関銃中隊の初年兵は約五十人ぐらいで、義勇隊出身者が二十人もいた。特に選ばれて幹部教育を受けたハルピンの義勇隊指導員訓練所から来た人たちが五人もおり、幹部候補生にほとんど合格して、教育を受けるため出ていった。兵隊は競争である。一選に漏れては面目がないと思いい下士官候補志願をした。合格はしたが、そのため、上級職を取られ苦しむことになったのである。重機関銃中隊の装備は重機が六銃であり、一銃に一箇分隊十一名を要し、二銃二箇分隊合わせて一個小隊、したがって三個小隊で一個中隊という編成であった。その他運搬は馬で、中隊に常に馬三十頭ほ

ど飼われていた。搬送駄載は銃馬と彈藥馬二頭が一銃につき、銃馬は左右に銃身と足を別にして載せ、彈藥馬は彈藥箱四個、左右に二個ずつ載せる。

關東軍より南方へ大移動が十八年から十九年にかけて行われた。その残った兵をもとに、十九年六月、内地から補充兵を入れ、十月に我々在滿の壮丁を徴兵し、翌二十年五月、いわゆる根こそぎ動員が行われ、四十歳前後の補充兵が入ってきて隊員の構成はますます悪くなり、転属が何回もあり、私たちの同年兵も三分の一ぐらいしか残っていないかった。装備も悪くなる一方であった。

昭和二十年四月ごろであった。連隊は我々一大隊を残し、後方金蒼付近の山奥に陣地構築をするということである。前線国境守備は王城山陣地が一中隊、望潮山陣地が二中隊、南陽陣地は一個小隊くらいの兵で守備していた。兵営では五月入隊の補充兵の軍事教育が激しく行われていた。七月下旬に南陽山陣地守備を命ぜられ、約二週間勤務についた。国境まで数百メートルの所にこちらのトーチカが並んでいたが、守るべき

兵隊が三分の一の兵力ではと不安であり、重火器もなく監視しているだけで心細い。夜間の歩哨勤務は特に緊張した。八月八日、勤務を交代して兵営に帰った。兵営内が異常に物々しい緊張した空気であった。待機命令が出ているということだ。ソ連が怪しい動きだとのことであった。

八月九日のことである。ソ連軍の偵察機が二機、兵営の上空を低空で飛行した。非常ラッパが鳴り、完全軍装で整列した。普通は各内務班ごとに点呼を受けるのであるが、戦時編成では第三小隊第一分隊の二番銃手である。機関銃隊は、銃に四人、彈藥手が四人、馬を扱う兵が二人、これに分隊長が加わり十一名であり、銃手は一番が観測、二番が装填、三番が連絡、四番が射手であり、分隊長の次に四、二、一、三という序列なのである。小隊長は加山軍曹分隊長か加藤忠上等兵四番射手か、芥川上等兵装填か私であり、下士官候補なので上級職なのであった。小隊長、分隊長も上級職というまことに悪い編成である。整列し、隊長よりソ連軍の侵攻が伝えられ、加山小隊は第三中隊に編入と

下命、直ちに行動し、第三中隊長義澤中尉の指揮下に入った。後方陣地にいる連隊主力と合流すべく行動が開始された。杜荒子という部落があり、その近くの杜北山という所の峠の要地を確保守備する任務を命ぜられ、九日夜半によくやくたどり着き、仮陣地をつくり敵を待った。

十一日午前十時ころソ連軍が現れ、戦闘は開始され、激戦が続き味方の損害もひどくなり、敵の迫撃砲と自動小銃には特に悩まされた。十二日未明命令があり、杜荒子まで撤退した。中隊の半数くらい死傷者が出た。機関銃小隊でも芥川上等兵以下五、六名の戦死者が出た。二銃の重機関銃は損傷していなかった。実戦を経て九二式重機関銃のすばらしさを見直した。

杜荒子の河原で前線陣地守備隊も撤退してきた。集結を完了して金蒼方面を目指して行軍を開始、十五日午前十一時、北荒嶺の高地付近でソ連軍戦車と遭遇、一台は重機関銃にて破壊したが、敵兵は増える一方であり、完全に包囲された。このころには既にはるか後方まで彼らは進み、我々は取り残されていたのである。

全滅状態となり大隊長は敵北に集結せよと指示し、包囲脱出を命じた。私たち生き残った義澤隊の人たちは隊長と一緒に谷間を見つけ下りて行った。翌朝明るくなって周りを見ると、わずか十五、六人であった。五人くらいの少数に分かれて行動することになった。時々現地人部落に近寄った。

赤旗が立ち、追い払われた。度々銃撃も受けた。目指す方向に向かって汪清付近の山中で、同じ琿春の師団の管轄で歩兵連隊の二〇三二八部隊の一個小隊に会い、隊長より乾パンをいただき、久しぶりで空腹を満たした。隊長の話で初めて終戦を知った。十五日といえば北荒嶺で戦闘の最中であつた。隊長は、我々も今日か明日武装解除を受けることになっている、君らもそうした方がよいと説得された。三里ばかり行くと馬村という部落があり、ソ連兵がいるからそこに行くようになると言われ、日本の軍隊の将校の言葉である、不安ではあるが信用せざるを得ない。一晚その付近で一泊し、馬村に下りて行った。マキシム重機関銃のそばで女の兵隊が立っていた。ニコニコ笑い顔である。五十

人くらしいの日本兵が集まった。六十七キロほどの所に
ある王精の町の日本人小学校に集められた。

翌日四、五百人集まり、四、五日かけて遠回りして、
金倉の急ごしらえの収容所に入れられた。ここまでの
道中、現地人集落には赤旗が必ず立ち、ポスターが何
枚も張っており、読んでみると、ソ連軍進駐のお陰で
日本軍閥が倒れ満州国が滅び、東北の各民族は解放さ
れた、斯大林大元帥万歳と大書してあり、抗日連合軍
第八連となっていた。中国人よりも朝鮮人の方が敵意
を感じられた。金倉の収容所は、山と山の谷間中腹に
鉄条網を嚴重に張りめぐらし、いくらでも収容できる
広さである。天幕で幕舎を建て、地面に枯れ草を敷き、
その上に毛布一枚だけで、衛生は非常に悪く伝染病も
発生、この人たちは別の谷間に隔離収容されたがほと
んど死んだと聞いた。十日ぐらいここにいた。その間、
ソ連兵の略奪が毎日のように続けられた。主に時計で
ある。今日までの道中もそうであったが、ことに激し
くなった。

金倉収容所で千人ずつの大隊が編成された。東京ダ

モイのためだとソ連軍将校は説明した。琿春を經由し
て沿海州に渡ると言う。金蒼、北荒嶺、杜荒子、こ
こで春化に向かわず右にそれ、琿春を目指す。私たち
が戦いながら撤退したコースだ。何という皮肉なこと
であろう。北荒嶺の戦場を通過した。戦死した屍はそ
の後一カ月以上たつて、しかも夏のことだ。誰彼の識
別も困難で、将校服の屍だけは第一中隊長の千葉中尉
と判断された。捕虜の立場だ、合掌だけして去るほか
なかった。何か所か屍の散乱する戦場を通過した。余
りの激しい刺激に半ば放心状態になってしまった。

四日目の夜、琿春の河原で夜営した。九月下旬の夜
は寒い、満州最後の夜を過ごした。

ソ連領に入った。陣地を通るとき、地雷のような物
が大量に掘り出されて置かれてあった。日本軍が降服
して必要がなくなったためであろう。満州よりの占領
物資を運搬する大型トラックがひっきりなしに通り過
ぎて行く。夜も続いた。ポセットに到着した。何年ぶ
りかで海を見た。

二日ばかり待っているうちに防寒具が渡された。

前々からうわさがあつた強制労働であるとガツクリした。乾パンを主とする食料が渡され貨車に詰め込まれた。貨車の戸は外から釘付けにされた。丸きり豚の輸送を思い出した。ただ眠るだけ、汽車は気違いのように入る。釘付けの戸をこじあげようと努力するが駄目、車内は暗く、馴れてきてもやつと誰彼の識別ができるくらい。長い旅の疲れ、汽車酔いも手伝い食欲もない。虚脱の状態。乗車後何日たったかまさだかでない、ただ生きているだけ。汽車がとまり、降りろと言うので降りた。立木が多く、通訳の話ではコムソモリスクの奥地だと言う。これから先は鉄道のレールがないので徒歩だとのことだ。簡単な身体検査があつた。ソ連軍の女医が日本兵の腕の皮と腹の皮をつまんで引いて見るだけである。皮下脂肪の厚さを調べるらしい。一級から四級までに分けられた。四級は一まとめにしてどこかに連れて行かれた。自動小銃を肩からぶら下げた看守兵が先頭に立つと歩き始めた。

旧鉄道線路沿いの道路を歩いた。十月半ばだということに寒さは厳しい。まだ雪は早かった。鉄条網で囲ま

れ、見張り台が四隅についた監獄跡らしい。古い建物の施設が所々にあり、続いている。囚人たちが木材の伐採に送り込まれていた。監獄地帯であるらしい。歩き続けて、夜は黒パン一切れ。倉庫のような大きな建物に詰め込まれて眠った。床は板張りであつた。次の日、夕方まで歩いて、そこにあつた監獄跡に入つて行った。ここが私たちの暮らす収容所らしい。翌朝大隊長から話があり、帰国まで約二年ぐらいここで労働に従事することが言い渡された。

寒さは日増しに厳しくなる。労働もきつくなりノルマを課せられた。木が多いので枯れ木の乾いた物を薪にして使った。シラミ退治は火力乾燥室があり簡単に解決してしまつた。その技術はソ連の囚人たちは上手であつた。フェルト製の防寒長靴も乾燥室で乾燥した。ロシアの囚人も多かつた。収容所での日本人は一個大隊である。入浴は十日に一度ぐらいであり、入浴の方は、室内の温度を汗が出るほど高め、お湯で体を洗うだけである。順番であるため、早い時であれば夜中の時もあった。入浴所にはソ連人のポストと日本人が三

名ほど勤務していた。入浴後必ず陰毛とわきの下の毛をそり落とされた。衛生のためらしかった。元床屋の兵隊が四、五人、理髪とその仕事に専従勤務していた。私は帰国する二カ月くらい前までここの収容所で暮らしたので、ほかの収容所のことには知らない。この収容所は六十三大隊と呼ばれていた。労働その他において、この地帯でも一番嫌がられていた。「地獄の六三、鬼の三大隊」と言われて、ここに転属になることを嫌がったと聞いている。

労役の種類は、まず木材の伐採（冬季に限られる）、夏は煉瓦焼き材料の粘土掘り、鉄道の再建設作業、道路作業などである。鉄道と道路作業は冬もあつた。冬に行われる伐採作業は、まず寒さが、時間が、我々を苦しめた。朝八時には出発する。零下四〇度以下の寒さの所を現場まで四キロくらい、凍傷が続出した。私も二、三回かかった。幸い大事に至る直前で手当てをした。どんなに寒かろうが八時間労働は必ず守る。夜遅くなくても仕事の時間には厳しい。一時間のうちの中十分くらいはたき火に当たらないと日本人には無理

だ。飢えている人にノルマに達しないと行って三割から半分ぐらいに食事の量を減らす。ますますノルマは下がる。たまに間違わないと達成できない。達成すれば食事の量が増し、達成できないと食事の量が減り、結果として四級に下がるか、死ぬか。最初の冬は死者が続出した。四等級になると一まとめにして休養させるか、軽作業、舎内当番や暖房用の薪づくりか、炊事の手伝いか、水くみくらいのものであつた。

一カ月も楽をすると若い体はすぐに太り、次の検査では二級か一級に上がり重労働となる。三級か四級になると、炊事やらパン焼き、味噌づくりの雑役に行かされる。時には食い物にありつき、むさぼり食う。一階級ぐらいうがってしまった。労役の中で喜びというか楽しみというか、それは食べ物の話しかない。話をして想像して楽しんだ。だれしもが代わる代わる話した。なかなかの話上手もいて皆を楽しませた。食いの話ばかりして、間違っても色気の話は出ない。体が七十歳くらいの老人と同じになってしまっているのである。

抑留者の統制は旧軍隊以上である。下級の兵隊は戦死、病死が多く、生き残ったのは下士官が多く、したがって編成は良過ぎた。小隊長は准尉か古參曹長、軍曹で分隊長、伍長で分隊長になっている人は少なかった。彼らの軍国主義は抑留でその極に達した。終戦前の陛下のため、国のためが、ソ連に置きかえられ、ソ連側の命令には服従した。苦しい分だけ兵隊をすごい。三カ月くらいの間隔で行われる身体検査でランク付けされ、三級か四級に下がらない限り、他の労役や勤務にかわることは絶対できない。労役猶予又は免除はこの検査結果により決定し、何人もくつがえすことはできなかつた。三級は軽作業、四級は休養が主で、居住する所も労役についている者とは別室である。ソ連軍医は検査だけで、日本の軍医と衛生兵が衛生管理を行った。収容所に医務室があり、日本の軍医大尉と衛生曹長、衛生兵が四名ほど勤務していた。危険な伐採現地には必ず衛生兵が救急カバンを持ってついていた。抑留者にとってはなくてはならない存在であった。朝夕の収容所の出入りは嚴重である。わずか五十人

を数えているのに、途中で忘れて数回やり直す。暖かいときは我慢できるが、寒いときには閉口した。着衣などは最初は日本軍のものが使われたが、徐々にソ連人の衣服が使われた。日本の防寒具では役に立たないことが分かった。ソ連のものは、日本のものに比べて使いやすく暖かくできていた。

食事は日に三食、それぞれの量は計算どおりにはいかないものである。団体の場合の中間搾取はあるものだが、ソ連は略奪、中間搾取の国である。彼らの「カラピチー（盗み）」の残を水で増やして我々が頂戴し、空腹に耐えかね、また飯盒でそれを増し、伸ばして空腹を一時補つたのである。もちろん、肉、野菜、魚はあるにはあつたようだが、私たちは匂いを嗅いだ程度である。私は三級のとき、倉庫の使役を三カ月ほどやり、そのからくりを深く知ることができた。休日は月に一、二度あつたように思う。演芸会は休日ばかりでなく、平日にも夕食後開かれた。兵隊の中には元プロが何人かいた。落語の昔々亭桃太郎なども一緒であつた。浪曲、落語、講談など、大勢の中にはプロ級の人

たちが結構いるものである。

施設構造は、ソ連の監獄に入ったのであるから一時的なものではなく、十分に計を立て長い間使ってきたものだけによくできていた。居住密度も上下二段でやや過密という程度である。

洗脳教育は、三カ月目ぐらいより日本新聞の配布から始められた。五人に一枚ぐらいの割合で配布された。読み物にも飢えていたので読んだ。ソ連軍将校や日本人講師による民主化教育が始められた。初めのうちは反発していたが、いつしか同調するようになった。軍国主義の下士官が一番変わった。自分らも共に働くようになった。この運動がなかったら、もつと兵隊は死んでいたと思う。収容所の入口に営倉があり、泥棒するとか特に悪いことをするとたまには入れられる人もいたが、普通ノルマの未達成ぐらいでは食事を減らされるだけで、だれもがいつものことであるので罰という認識はなかった。

飢えも寒さも重労働も、人間には馴れるという性質があると思う。帰国という夢を、希望をただ一日とて

も忘れなかった。腹いっぱい食って働ける日を夢見た。

もともと開拓訓練を三年以上も過ごしてきた私は、農業に生きようという心はますますつのるばかりであった。収容所に入って半年以上くから夜間一時間か二時間ぐらい、ロシア語講座と民主教育講座が毎晩開かれた。私は必ず毎日出席した。出る人は少なく、周りの人から度々注意されたり、非難されたりした。赤になつて帰国したら親兄弟に迷惑がかかる、会社からも受け入れられないというのが言い分である。勉強してどこが悪いのか、知らないより知っている方がよい、俺はやるぞと思った。日本新聞なども何回でも繰り返し読んだ。講師にも質問を繰り返し、彼らの考え方もよく聞いた。この捕虜生活を無駄にはすまいと考えた。二十二年三月に検査が行われた。四級に下がった。

一まとめにして約五十人ぐらい、約一里ぐらい歩かされて一二大隊収容所に入れられた。そのときは、これが帰国の始まりとはだれも知らない。十日ばかりぶらぶら軽作業をしたり、演芸会などしていた。また移動だという。今度は汽車にも乗せられた。その当時、既

に鉄道は復旧していた。約一時間くらい走ってドーフに着いた。この地域の中心地である。大きな収容所に入れられた。翌朝、大隊長より帰国が発表された。

帰国が発表になってからは、毎日作業はなく民主教育が仕事になった。このころになると下士官たちはますますおとなしく、反対に根こそぎ運動の補充兵たちが幅をきかせてきた。彼らは年齢は大きく十歳以上も違っている。その上教育があるので当然かもしれないが、私たち若い現役兵にとってこの状態も気持ち良いものではなかった。オルグと呼ばれている人たちが交代で演説をした。ロシア人将校、日本の講師も講演を毎日繰り返した。帰りたいから黙って聞いていた。毎日毎日、これでもか、これでもかというほど同じ言葉が繰り返された。講師やオルグの表情を見ると、この人は飢えている人か、満腹の人かくらいの見当はつく。食い足り、満ち足り、覇気満々たるは、健康でしかも必要十分なる栄養を取っていないわけではできないと思う。このオルグの人たちは多分兵隊の期間も短い、しかも知識人であるなど思った。

四月になり、各人に新しい夏の衣服が渡された。季節もよく最高のときだ。貨車に乗せられて来たときとは大違い。車内の高窓も開けられ、走行中貨車の戸が開けられても危険がないように丈夫な木を打ち付けてあつた。自由に外をご覧下さいと言わんばかりだ。こうなると、汽車輸送はむしろ客車より貨車の方が横になれるだけ楽だ。食はまあまあであり、旅行をしているような気分だ。戦争で戦死した人たち、病死した人たち、シベリアで亡くなった数多くの人たち、思い出深きシベリアの地より沿海州へ。未開の原野、山々や谷、時には海も見えた。時には駅に停車した。ホームにも出て散歩した。看守兵も何も言わない。行き交うソ連の人たちとも話し合った。片言ながら言葉も通じた。彼らも人情は同じであろう。年配の女性はダモイ・ハラシヨを繰り返し、お母さんが喜びますよと言った。汽車はナホトカ目指してひた走る。ナホトカに着く。第一ラージェルに入る。

待ちかまえていたようにオルグの連中、少々しつこ過ぎる。汽車の長旅、ゆつくりしたいが休ませてくれ

ない。代わる代わる一節ぶち上げる。頭には入らない。ただ黙って彼らを見ていただけ。栄養が良いのか、顔がツヤツヤしている。彼らが近づいてきて聞き取り調査だ。一人でも多くのいわゆる反動分子を見つけようと、うの目たかの目だ。危険極まりない。第一、第二、第三ラゲルと二日おきくらいに通り返した。元憲兵、警察、また共産主義に非共鳴者も調べる対象になっていた。そういう人たちは通過でさす逆戻りだ。私も六三大隊当時勉強したことなぞだれにも話さなかった。

第三を出て船に乗る前、ソ連将校より名前を読み上げられた順に門の外に出た。地獄と極楽の別れ道だ。幸いに名前が読み上げられた。小さい丘を越えると港だ。日の丸の旗を立て、船腹には第一大拓丸と大きく船名が書いてある。すぐに乗船、タラップを上がっていくと、看護婦さんが四人ぐらい立って出迎えてくれた。「ご苦労さんでした」とあいさつをされた。しばらくぶりで見る日本女性。ソ連人を見馴れているせいか随分小さく感じた。係員に薬品粉末を襟元から投入された。シラミ退治らしかった。

ナホトカの港が見えなくなるまで甲板に出て眺めていた。今日は快晴であり、波一つない。船が進んでいる感じがしない。一昼夜の船中生活は平穏であった。舞鶴港に上陸したのは五月の三日であった。

帰国後、三、四カ月で体も完全に回復した。十六歳で家を出て七年、二十二歳になっていた。長兄は戦死し、次兄が後継ぎとなり嫁を迎えていた。農業の手伝いをしていりうちに縁談が持ち込まれた。古い農家で、母親を昨年失い、父親も病気である家庭であった。相手の女性は十七歳である。私は百姓になりたいと思っていたところだし、相手の娘さんもきれいな娘さんであったので養子に行くことに決めた。

翌二十三年一月に結婚した。その年の暮れに養父が死亡した。祖父母は健在で、妹三人と末に男の子がいた。責任は重かった。田畑の土地改良や開墾に励んだ。妻や義妹たちもよく働いた。満州の開拓の教育とシベリアにての経験と勉強は無駄ではなかったと思う。間もなく土地改良と増反の努力が実り始め、甘藷、落花生の輪作を可能にし、大いに増収をし経営も楽になっ

た。土地も買入れ、ゆるぎない農家の基盤を築くことができた。義妹たちもそれぞれ良縁を得て嫁いだ。義弟は私たち夫婦に子がないので養子とした。実家の兄の長女を養子の嫁にして後継者とした。

年齢も七十歳を迎えようとしている現在、ますます健康管理に努め、故人となられた戦友、拓友の菩提を弔いながら、供養を怠らない生活を続けようと考えている。

【執筆者の紹介】

執筆者、高橋太造氏は満蒙开拓義勇軍に参加して、茨城県の内原訓練所に入所し、それから満州に渡り、満州开拓青年義勇隊訓練所において一年間で基本訓練を終了したので、北安省依安県泰安の入植予定地に先遣隊として入植した。昭和十九年に行われた繰り上げ徴兵検査を甲種合格し、軍人となった。

「東京ダモイ」とだまされ、長途シベリアの山奥に抑留されていた。二年余りいろいろな仕事についていたが、その後洗脳教育をたびたびやるようになった。

オルグの人が時々回ってくるようになり、この人たちににらまれたら「東京ダモイ」はないのですから、ナホトカで一人一人名前を呼ばれ乗船し、船が沖に出て初めて東京ダモイである。一昼夜で舞鶴港に上陸し、宿舎にて身体検査を受け、その後銚子へ汽車にて帰省した。

利根川を渡り矢田部へ帰った。二十二歳だった。昭和二十三年に結婚した。

田畑の土地改良や開墾に励み、施設園芸時代には園芸出荷組合を結成し、農産物の有利販売、技術向上に努め、各出荷組合の農協への統合を運動し、ピーマン、メロン産地をつくった。昭和五十年、茨城県農業経営士に認定、農協の営農指導顧問として十五年間奉仕活動をした。昭和五十八年、茨城県農業青年海外農業視察団の副団長として農業視察をした。

(茨城県 府馬 正治)